

関学英文の一員として

石 野 尚
(2011 年度 D)

関西学院大学英米文学英語学専修（旧英文学科）創設八十周年をお慶び申し上げます。「関学英文の思い出」についてのエッセイの話を伺ったとき、私などに思い出を語れる資格はないのではないかとと思うほど、私は関学英文の新参者ではありますが、大学設立当初より開設された歴史ある文学部英文科の一員となれたことには喜びを感じています。私は、大学院前期課程まで神戸女学院で学びましたが、その後、後期課程への進学を決意し、縁あって関西学院大学大学院文学研究科博士課程に入りました。長年、女子校で女子独特の環境・教育に慣れ親しんでいましたし、新しい環境に、しかも大学院後期課程から入るということには正直不安もありました。しかし、関西学院には、神戸女学院と同様に、豊かな自然に囲まれた、ヴォーリス博士の建築校舎の美しいキャンパスと、キリスト教に基づく建学精神という、物理的にも精神的にも私にとっては非常に親しみやすい伝統があり、つい最近に関学の一員となった私にもすぐに、関学が母校と思える気持ちが芽生えました。

関学は開放的な雰囲気です、部外者の私でも自然に溶け込めました。そして、以前から関学生であったかのような気持ちで、順調に大学院生活を始められました。その一方で、学問、そして師においては新鮮な出会いを多く経験し、今までの自分の視野の狭さを反省したり、新しく目の前に拓けている研究内容に意欲がわいたり、研究に興味深く取り組んだ院生生活を送ることができました。後期課程では言語学を専攻し、生成文法理論における統語理論及び第二言語習得理論を専門に研究を行いました。院の授業では、現在の生成文法において取り組まれているミニマリストプログラムの最先端で行われている研究を教授頂けたことのみならず、言語現象の分析において、どの

ように理論的な視点を見つけたらよいのか、その感覚を養われたことに感謝しています。第二言語の習得を研究テーマに選択して以降、調査実験による観察を基軸とした研究に終始しがちであることに当初は違和感があり、自身の研究では方法論的に従来のものとは異なるアプローチをとることにしましたが、その違和感がどこからくるものか自分でははっきりとは分かっていませんでした。しかし、指導教授とのアポイントを重ねているうちに、単に方法論的に異なるだけではなく、そこに理論的な意義があること、大きく広がる可能性があることを認識でき、今までとまったく違う景色が見えたという経験をしました。当初の違和感はすっかりなくなり、最後には納得して論文を仕上げられたこともとても幸いなことでした。

また、これは英語学の専攻の院生の場合ですが、上ヶ原キャンパスで GL という勉強会が開催されています。この勉強会では他大学院生も発表していて、影響を受けました。英文の先生には、関学生はまだまだ世界が狭いご指摘を受けるのですが、関学の院生は皆国内外の学会活動で意欲的に発表を行っていて、そのような経験も以前の私にはなかなか難しかったことですし、関学院生と名乗ってどンドン外に出ていったことも、私にとっては関学英文の一員としての意識を高めることになりました。

そして関学英文でこそその得難い経験としては、毎年二、三回開講される集中講義で、当該分野で世界的に有名な教授の方々に全国から来て頂いて、直接の御指導を受けるといって、学問的に極めて贅沢な機会にも恵まれたことです。論文や本の著者でお名前をよく拝見し、他大学ではめったに集中講義をされることのない先生から、研究の話から人生の話まで伺えました。これも関学英文の先生方のおかげだと心から感謝しています。

もう一つ、関学英文の力強さが印象に残っているのは、母校愛に留まらず、「英文愛」が強いことです。私も、昨年開催された盛大な八十周年記念式典に参加致しましたが、大先輩方の同窓の集いというだけでなく、英文の現役学生達も多く参加していて、先輩方との交流を楽しんでいました。私自身にとっても、久々に再会できた先輩や初めての方々ともたくさんお話でき

ました。皆さん全国各地の大学で研究者、教員としてご活躍ですが、皆さんにとってやはり戻ってこられる懐かしい場所であり、そして多くの卒業生に、こうして記念式典には集まろうという熱い思いや人の縁を大切にする英文愛が脈々と受け継がれていることを感じる事ができた一日でした。

今は文学部で非常勤講師をしています。自分が学び研究することと、その学んだことを実際に行動で現すこと（教えること）とは全く異なり、日々試行錯誤をしています。また、研究科研究員としても英文に所属していますが、このように大先輩方の支えてこられた伝統のある関学英文に連なるもの一人となれたことをうれしく誇りに思うと共に、学問的・人間的にも視野を広げることができた関学英文の良さを少しでも後輩にバトンパスしていきたいと願っています。

